家族システムの発達と移行に関する研究(4)

地域生活満足度および居住継続意図への影響要因の検討

○石盛真徳¹・小杉考司²・清水裕士³・藤澤隆史⁴・渡邊太⁵ (非会員)

(¹追手門学院大経営学部・²山口大教育学部・³関学大社会学部・⁴福井大子どものこころの発達研究センター・⁵大阪国際大人間科学部)

キーワード：家族システム論、コミュニティ意識、生活満足度

The development and transition of families in Japan from the family systems theory perspective (4)

Masanori ISHIMORI¹, Koji KOSUGI², Hiroshi Shimizu³, Takashi FUJISAWA⁴, and Futoshi WATANABE⁵ #

(¹Otemon Gakuin Univ., ²Yamaguchi Univ., ³Kwansei Gakuin Univ., ⁴Fukui Univ., ⁵Osaka International Univ.)

Key Words: family systems theory, sense of community, life satisfaction

目 的

本研究では、家族システムの発達と移行について明らかにすることを目的として、子育て期を終了する前後の家族に属する夫婦を対象に調査を実施した。

方 法

調査は2012年11月から12月にかけて、東海地方在住のイブソス株式会社の調査モニターを対象にインターネット調査で実施した。調査時点で家族成員全員が同居しており、かつ末子が高校生の4人家族の父親と母親を調査対象とした。223組の夫婦(夫の平均年齢49.7歳、妻の平均年齢47.1歳)から有効な調査の回答が得られた。用いた調査項目は、年齢・職業・学歴等のデモグラフィック要因に関わる16項目、コミュニティ意識尺度短縮版12項目(5件法、石盛・岡本・加藤, 2013)、「居住継続意図・地域生活満足度」など地域での生活に関する8項目(5件法)、地域の現状認識に関する5項目(5件法)、地域特性の測定項目12項目(5件法、柴内, 2010)、FACES III 日本語版の凝集性10項目・適応性10項目(5件法、草田・岡堂, 1993)、身体的・精神的健康尺度9項目(4件法、諸井, 1996)、主観的幸福感尺度3項目(4件法、伊藤他, 2003)、子どもとの会話で話題として話す程度を測定する7項目(4件法)、夫婦間の問題への対処方略尺度の下位尺度のうち「積極的アプローチ」5項目と「回避」5項目(5件法、野澤, 2008)等であった。

結果と考察

コミュニティ意識と地域の現状認識に関する男女差を検討するためにt検定を行った。その結果、表1の通りコミュニティ意識の他者依頼、地域の結びつき、地域の熟知、地域のあいさつ・マナー、および地域での参加交流において有意差が見られ、すべての項目の平均値で女性の平均値が高かった。男性よりも女性のほうが地域の現状についてポジティブに評価し、かつ積極的に参加交流している一方で、他者依頼の意識が強いという結果であった。

表1 コミュニティ意識と地域の現状認識に関する男女の平均値

	男性	女性
連帯・積極性	2.73	2.78
自己決定	3.41	3.44
他者依頼	3.06	3.18 *
愛着	3.14	3.10
地域の結びつき	2.87	3.02 *
地域の活動レベル	3.00	3.12
地域の熟知	2.51	2.68 *
地域のあいさつ・マナー	3.13	3.32 **
地域での参加交流	2.60	2.91 **
地域での孤独・孤立	2.24	2.22

* $p<0.05$; ** $p<0.01$

次に、地域生活満足度に影響する要因を検討するために、生活満足度を従属変数、性別(男性=0、女性=1とするダミー変数)、地域の現状認識に関する項目、コミュニティ意識、身体的・精神的健康尺度等の心理尺度の下位因子を説明変数とする重回帰分析をステップワイズ法により行った。その結果、表2の通り、愛着、家族の柔軟性、地域の結びつきがそれぞれ正の、うつと性別がそれぞれ負の有意な影響を有していた。地域コミュニティへの愛着が高く、地域の結びつきを強く認識し、家族の柔軟性が高いほど地域生活満足度が高く、逆にうつ傾向が高いほど、また男性よりも女性の方が、生活満足度が低いという結果であった。

表2 地域生活満足度を従属変数とする重回帰分析結果

説明変数	β
愛着	.388 **
うつ	-.174 **
家族の柔軟性	.135 **
地域の結びつき	.112 *
性別ダミー	-.083 *
R^2	.323 **

** $p<0.01$; * $p<0.05$

同様の方法で、居住継続意図を従属変数とする重回帰分析を行った結果、表3の通り、愛着、積極的アプローチ、家族の柔軟性が正の、地域での孤独・孤立と子どもとの会話に負の有意な影響を及ぼしていた。この結果は、地域コミュニティへの愛着が高く、夫婦間の問題に積極的アプローチを取る傾向にあるほど、また、家族の柔軟性が高いほど居住継続意図が強くなるということを示していた。逆に、地域での孤独・孤立の高さと子どもとの会話の多さは居住継続意図を低めるという影響を及ぼしていた。

地域生活満足度と居住継続意図に家族の柔軟性という家族関係に関する要因が共通して影響を及ぼしていた点は、家族のあり方と地域コミュニティとの関連性についてより詳細な検討の必要性を示唆する結果といえる。

表3 居住継続意図を従属変数とする重回帰分析結果

説明変数	β
愛着	.456 **
地域での孤独・孤立	-.187 **
積極的アプローチ	.109 **
子どもとの会話	-.134 **
家族の柔軟性	.094 *
R^2	.348 **

** $p<0.01$; * $p<0.05$

*本研究では JSPS 科研費 24530799 の助成を受けた。